

般舟三昧と淨土教

色 井 秀 讓

般舟三昧と淨土教との關係は、既に最古の般舟三昧經に見出される。昨年發表したように諸異本中一卷本が最古の成立であるが、その行品に、諸佛の現在前立を具體的に示す一事例としての阿彌陀佛の現前と、その佛國への往生が説示されており、このことは何らかの形で阿彌陀佛經典が存在していたことを物語っている。そしてそれに「一心念^①之一日一夜若七日七夜、過^②七日^③已後見^④之」とあるのが阿彌陀經に類似しているとし、これによつて小經は般舟三昧經の影響を受けて成立したとする説がある。小經の「聞說阿彌陀佛執持名號若一日乃至一心不亂」は般舟三昧の實踐であり、來迎を現在其前 *puratah śāstiyati* と示しているのは般舟三昧的表現であつて、小經における般舟三昧の影響は否定できないが、小經には他に諸佛崇拜思想、悲華經思想の影響もあるから、大經の原型をなす程古い成立ではない。それ故に古い形の般舟三昧經と淨土教との關連を探るには、大經の各異本を検討しなければならぬ。

現存の大經各異本の成立の先後については私は、大阿彌陀經・平等覺經は古い形、無量壽如來會・無量壽莊嚴經・梵本は新しい形、無量壽經は古形から新形に移る中間の形、古形の中では大阿が古く、新形の中では如來會最も古く、莊嚴經は多少系統の違ふ一本で最も新しい、という見解をとつてゐる。これには色々問題があり、特に壽經と莊嚴經との位置については相反する説もあるが、大阿が最古であることは一般の認める所である。

大經各異本について般舟三昧思想を探る目安となるのは、生因本願文と三輩往生文、特にその來迎に關する記述である。來迎は臨終という特殊な時限におけるものではあるが、行者と佛との對面、即ち般舟三昧の完成である。然るに生因本願と三輩往生文との間には他の願文と成就文における以上に跋行の存する場合があり、生因本願についてもまた三輩の分別についても、種々問題があるが、一切省畧して當面の問題に絞つておく。

(B)(C)は缺。第十九願と上輩とが對應して左の通り、
 (A)〔願〕_レ至心發願欲_レ生_二我國_一。〔輩〕_レ一向專念_二無量壽佛_一願_レ生_二彼國_一。

(C)〔願〕_レ與_二大衆圍繞現_二其人前_一。〔輩〕_レ無量壽佛與_二諸大衆現_二其人前_一。

(B)〔願〕_レナシ 〔輩〕_レ欲_レ於_二今世_一見_二無量壽佛_一、應_レ發_二無上菩提心_一修_二行功德_一願_レ生_二彼國_一。

第二十願と中輩とが對應して左表の通り。

(A)〔願〕_レ聞_二我名號_一係_二念我國_一至心回向欲_レ生_二我國_一。〔輩〕_レ一向專念_二無量壽佛_一願_レ生_二彼國_一。

(C)〔願〕_レナシ 〔輩〕_レ無量壽佛化現_二其身_一與_二諸大衆_一現_二其人前_一。

とあり、下輩では對應の因願なく、(A)が「一向專_レ意乃至十念_二無量壽佛_一願_レ生_二彼國_一、乃至一念念_二於彼佛_一」以至誠心_二願_レ生_二彼國_一、(B)が「夢見_二彼佛_一」とするのが自然な理解であろう。來迎に關して因願文・三輩文共に、現其人前と般舟三昧の表現である。一心常念について願文は、依然欲生の常念であるが、三輩文では一心專念無量壽佛と三輩共に佛の專念をとりあげている。更に今世見佛を夢中の見佛に期待せず、見佛の方法を願生に求めている。この點この經では佛の專念によつて佛の現其人前を求めるといふ般舟三昧の姿が見られる。

如來會と梵本とは共に壽經と同じ傾向にある。のみならず古形大經では一般的な諸行作善が主たる行法であり、壽經においても一向專念をとりあげながらなお諸行作善が大きな幅を占めていたものが、如來會・梵本に至つて、善根回向を要請してはいるが、專念無量壽佛が主たるものとなつてゐる。

又莊嚴經は、因願文にも成就文の三種往生にも内容上の變質があるので、この問題に關しては除外しなければならぬが、その往生願文では「念_二吾名號_一發_レ志誠_レ心堅固不退」と念名號の形の一心專念を以て唯一のものとしてゐるのを見のがしてはならない。これらのことは新形大經には、往生因行として廣い幅を占めていた諸善万行に代つて、一心專念が漸次その地歩を占めるに至つたことを示し、ここに般舟三昧思想の影響を見出すことができる。

古い大經には般舟三昧の色がない。古い般舟三昧經は阿彌陀佛經典の存在を示している。この二つの事實から、最古の阿彌陀佛經典は般舟三昧經とは關係なしに成立し、般舟三昧經は阿彌陀佛經典を一資料とした、という成立事情を推測し得る。而して古い大經の般舟三昧受容の素地が手引となつてそれが取入れられ、一心專念阿彌陀佛を以て主たる往生因行とする新形大經獨特の念佛思想となつた、と考えられる。又般舟三昧經では各種異本の出現があり、一卷本に既に見られる一切唯心的な基礎理念、これは行品の鏡と影像の譬喩で以

て示されるのであるが、これに基づいて三卷本以下で般若空觀を背後思想にもちきたつたという發展はあるが、般若三昧自體についての發展は各異本の上には見られない。然し龍樹がしばしば般若三昧經を引用しているが、その扱ひ方の中にその進展が見出される。即ち龍樹は般若三昧を念佛三昧と稱し、三十二相八十種好を以てする色身の念觀、四十不共法等佛の功德を以てする法身の念觀、あるいは實相を以てする念觀、佛の十號を以てする念觀を示している。これは佛の一心專念を具體的かつ方法的に説示したもので、この場合、佛との對面という受動的な般若三昧が、佛の念觀という能動的な念佛三昧に發展しているのが知られる。

名稱は般若三昧となつてはいないが、龍樹の般若三昧觀を通して見る時、その能動的な念佛三昧、あるいは方法的な念觀を主題とする故に、同一系統に屬するとなし得る經典がある。菩薩念佛三昧經と觀佛三昧海經とがこれである。何れも佛滅後の弟子がまのあたり佛を見るための三昧的方法を説いた經典で、般若三昧經と同一性格である。前者では滅後の菩薩の自利利他行として般若空觀に立脚した三昧行を説き、後者では滅後の凡夫の爲に、觀佛の方法として佛の色身・功德の觀想を詳細に説き、思想的には、如來藏思想が前提となり一切唯心的な考えを強く打出している。又莫然とした諸佛でなく、後半で過去七佛、現在の十方十佛の念觀を説き、前半

般若三昧と淨土教（色井）

では佛一般を扱いながら、それが釋迦牟尼佛の觀想に志向していることが容易に觀取される。のみならずこの經の説相には、觀無量壽經と共通のものが諸所に見出される。

觀經はその第九觀に「見此事一者即見十方一切諸佛、以見諸佛」故名念佛三昧とあることから知られるように、やはり般若三昧の系統に屬する。觀佛三昧經の諸佛から釋迦牟尼佛への集約を、阿彌陀佛に轉換する時、觀經への到達を無理なく理解することができる。その詳細な跡づけを未だ果しておらず、これは單なる見通しにすぎないが、若し然りとすれば、大經・小經・觀經に實踐の方法として、般若三昧が大きな地歩を占めていることが實證されるであらう。そうしてこのことは、廬山惠遠禪師の結社念佛、天台大師の常行三昧の念佛は勿論のこと、本願念佛の始祖善導和尙にも、觀山念佛の大成者惠心僧都にも、般若三昧的なものが多分に見られるのであるが、そのこのの意味を、原始淨土教の觀點から解明してくれるであらう。

- 1 望月博士「淨土教の起源及發達」三一二頁。
- 2 天台學報第五號、觀山學報第二十二號所載の、阿彌陀經の成立に關する拙稿參照。
- 3 この問題について戰前、高田學報・哲學研究誌上で論じたことがあり、今日では訂正すべき點もあるが、結論に變りはない。
- 4 池本教授「大無量壽經の教理史的研究」、藺田教授「無量壽經諸異本の研究」。
- 5 「十住毘婆沙論」念佛品第二十一助念佛三昧品第二十五。